
天国と地獄と一人の男(仮)

ShiroBlack

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

天国と地獄と一人の男（仮）

【Nコード】

N2949Y

【作者名】

ShiroBlack

【あらすじ】

「死にたい…。」男の望みはそれだけだった。

00. はじめに

この小説はほぼ間違いなくシリーズ化します。

その場合、本作は完全オリジナルですが、二作目以降は二次創作の作品になります。

どこまで続くかは分かりませんが、現段階での候補は二つあります。簡単なまとめをこの小説の最後か二作目の初めに載せますので、二次創作が読みたいと言う方は、この話を飛ばしていただいても結構です。

この小説は、二次創作の作品では簡単に済まされがちな「漫画やゲームの世界に行くまでの話」を、多少膨らませてみただけの内容であり、要するに「設定にストーリーをつけてみた」話です。

作者の中でのメインはあくまでも二つ目以降の小説であり、この小説はそのプロローグに過ぎませんので、閑話なしの駆け足進行になる可能性が高いです。

章タイトル「プロローグのプロローグ」も、そういう意味で付けました。

また、設定上小説の終わり方が中途半端になる可能性が非常に高いです。

これらの理由により、濃厚なオリジナル小説を望まれている方のニーズにはお応えできません。

この小説には、主人公最強・ハーレム等の、所謂最低系要素が織り込まれています。

また、作者にとっては処女作であり習作でもありますので、文章が拙い・語彙が足りていない等の不満を感じられることも多々あるか

と思います。

以上の事に納得していただいた方、残念ですが納得できないという方、どちらも第一話へとお進みください。

01. プロローグ（前書き）

一言でまとめると、「あるところに不幸っぽい男がいました」という話です。

男の生い立ちの説明回ですね。

01. プロローグ

——カチッ……カチッ……。

静寂とした部屋に、マウスが音源のクリック音が響く。

「あー…自分もこんな風になれたらなあ。」

そこにあるベッドには、枕やらクッションやらが積み上げられ、それを背もたれにして時折一人の男が呟く。

「俺の“非日常”はどこですかー？」

【非日常】

——日常的ではないこと。当たり前ではないこと。また、そのさま。

彼はひどく飽いていた。

……。

……。

普通の両親を持つ、普通の女と、多少裕福な家庭に生まれた、少しダメな男。

そんな男女が出会い、親しくなり、やがて女は子を孕んだ。

そうして彼らは結婚し、一人の赤子が生まれるのである。

彼らは何か特別なことをしたわけではなく、多くの人間と同じように、出会い、結ばれたのだ。

その時に生まれた赤子が、この物語の主人公である。

幼少期の彼は、比較的賢い子であった。

ある程度物の分別はつくし、他人の気持ちも、子供なりに察することができた。

本が好きだった彼は、寝る前に母が読み聞かせてくれるのを嬉しく思っていた。

彼は特に悲しい話、可哀相な話に心を動かされた。

優しい彼は、同じ本を何度聞いても泣いていた。

ある日、通っている保育園で一人の子供が彼を故意に傷つけた。

それを知った保育士は二人を呼び、彼に「相手の子供を殴り返せ」と言ったのである。

保育士の考えでは、“やったらやり返される”と言うことを相手の子供に学ばせることができるし、彼にも“強い心”を持って欲しかった。

しかし彼にとっては、状況がどうであれ“人を殴る”と言う行為が、

とても悪いことに思えたし、そうでなくても、人を傷つけることは苦手だった。

そもそもやり返したいなどは考えていなかったし、傷つけられたことなど既にどうでもよかった。

それを言われたから、許可されたからと言って、やろうとは思わなかった。

故に彼は、断ったのである。

「殴ってみなさい」「やだ」

：このやり取りが何度が続いた後、遂に彼は泣き出してしまった。

そこで保育士は諦めたのだが、この一件で彼は、“優しすぎる子”と親や保育士に認識されることとなった。

成長するにつれこの出来事を彼は忘れていったが、ある日母にこのことを聞き、思い出した。

しかし彼自身が思い返しても、この時の彼の行動は（自分の性格をよく把握していた故に）自分らしいと思えたし、また同時に誇らしいとも思えた。

彼が5歳になる年、弟が生まれることがわかった。

その頃の彼は、よく父方の祖父母の家に預けられていて、父親は仕事に行き、母親は少しの仕事や遊びに出掛けていた。

母親が仕事をあまりしなかったのは、「俺が稼ぐから働かなくていい」と夫に言われたからである。

それはともかく、その祖父母のことが彼は好きでも嫌いでもなかった。

そもそも家族愛のような感情は、彼にはあまりなかったのである。あえて言うならば、「赤の他人よりは好き」といったところだ。

弟が生まれて少しした頃から、両親の仲は段々と悪くなっていった。怒った母が、父を力いっぱい引き摺る程度の暴力を振るっているのを、彼は黙って見ていた。

もちろんそれなりの理由はあったが、子供の彼には、なぜそうなったかはまだ分からなかったし、成長した今でも、知らないままだ。ただ当時は、“父親が悪い”という程度は、分かっていたようである。

それでも彼は、そんな二人の姿を見るのは当然好ましく思っていなかった。

父がそういう風に扱われることを、かわいそうだと思ったのだ。

それに、食事中にやられるとご飯がこぼれることや、怒鳴り声が煩いのも嫌だった。

しかしほとんど父と話さなかった彼は、母親の方が好きだった。

だから母がやりたいようにやらせたかったし、そもそも言うほど興味はなかった。

ただ、その光景を見ていた彼は、なんとなく悲しい気持ちになった。

彼が小学校へ上がり、弟も保育園へと通い始めた。

彼は相変わらず賢く、勉強などは簡単にできたし、運動の成績もよかった。

文武両道に長けていたのだ。

家族や周りの大人たちは、既に彼に期待を寄せていた。

彼の家系は特に勉学に長けた人物が少なく、いわゆる職人が多かった。

両親も高校卒業しているとは言え底辺レベルだったし、「トンビが鷹を産んだ」などと、よく言われたものである。

人見知りをしがちだった彼だが、保育園の時の知り合いもいたし、

他の子供たちとはそれなりに馴染むことができた。

とは言え、彼は気付いてはいなかったが常に周りに線を引いていたし、本当の意味での友人は一人もいなかった。

だから放課後にみんなで遊ぶようなことは少なかったし、彼もまたそれを当然だと思っていた。

もちろん遊ぶ時は友人として接していたし、みんなとの仲は悪くはなかった。

四年生になった頃、彼はようやく自分と他の者達との違いに気付き始めた。

そして、友達が欲しいと思うようになった。

それからの彼は以前よりみんなと遊ぶようになり、“クラスメイト”ではなく“友人”と思えるような人間も何人かできたと思った。

ただ、何かが違う気がしていた。

五年生になり、彼はまた周りに疑問を持つようになった。

と言うのも、友人だと思っていた人間に、裏切られることが多くなってきたからである。

いわゆる“いじめ”にはならなかったが、なぜか彼には友人などできていなかった。

昨日裏切った人間が、今日は友達のように接してくる…ということもよくあった。

そして相変わらず優しすぎた彼は、それを受け入れ、また裏切られる…そんなことの繰り返し、続いていた。

しかし彼はそのこと自体では、それほど悲しくはならなかった。

むしろ、そういったことをしてしまうクラスメイト達の心をもって悲しんでいた。

家庭では両親の仲が以前よりも悪くなり、夫婦の会話というものは段々となくなっていた。

が、なぜかそのタイミングで、（もちろん母は同意していたが）父の憧れていた一軒家を買った。

そして、弟の友人の家族がよく家に遊びにくるようになった。

そこで彼は、“自分の両親の不仲は普通の事ではない”と再認識したが、結局そこに特別な感情は抱かなかった。

しかし彼は、そこで抱くべき感情について知っていたし、そういう一般的な反応ができない自分が、ひどく悲しく思えた。

自分の感情が希薄なのではないか、と思い出したのも、この頃である。

中学へ入っても、彼は相変わらず優秀だった。

勉強の方は、塾などに通わなくても（一学年二百人弱程度の）学校では一番の成績だったし、スポーツだってできた。

彼は人間の感情について理解していたし、自分を妬む輩が必ず出てくると思ったが、特に自重はしなかった。

周りの人間の期待などに興味はなかったし、妬みにも興味はなかった。

…そうして、何事もなく一年が過ぎていった。

二年生になり、自分の感情の希薄さを思い悩んだ彼は、“何かに熱中してみたい”と思うようになった。

基本的に何でもできる彼は、自分にとってあまり起伏のない人生をつまらなく感じていた。

そして彼は、次第に“非日常”を望むようになっていくのである。

しかし、実は“起伏がない”というのは彼の思い違いで、“伏”はしっかりとあった。

この時点では、度重なる友人の裏切りや両親の不和、それに自分の性格や感情についての悩みなどだが、そういったもののストレスは徐々に彼の心を蝕んでいった。

ところで彼は、自分の優秀さについてはもちろん理解していたし、それを鼻にかけたりはしなかったが、同時に一人の力の限界も感じていた。

ネットやテレビや自分の眼を通して見る、この国や社会、世界などといったものの理不尽さが、彼には我慢できなかった。しかし彼にとっては問題が大き過ぎ、多過ぎた。

彼が出したのは“仲間と一緒にやる”といった、正解と言える解答だったが、あいにくこの時点の彼は他人を信用はしても、信頼はできなかった。

自分がそうなった原因を考えると、それは今までの人間関係だと思えた。

彼は本当に一切悪くなかったし、そのことを彼も分かっていた。

中学に入ってから、なぜか人がくっついたり離れたりしていくことは認識していた彼だったが、同時にもう手遅れのようにも感じた。結局、彼に新たな悩みが増えて、この問題は終わったし、ある意味では続いていくこととなった。

二年生の半ばまでくると、彼は生徒会長になっていた。

これは、誰も立候補者がいないことを予想した教師陣が、それを当時の学級委員から出すことにし、委員会の会議で彼を推薦したところ、彼以外の委員たちも彼を推し始め、結局彼がそれを断れなかったことによるものだった。

簡単に言う“生贄”である。

教師たちは真面目で優秀な人間にやって欲しかったし、生徒たちは

やりたくなかった。

どちらも彼の性格をそれなりに知っていたし、断れないであろうことを予想して行った結果である。

彼は相変わらず、どうでもいいと感じていたが、そうなった以上はしっかりとやることにした。

スピーチなどの原稿は（入学式での挨拶等のそれなりな大舞台ですら）丸暗記して、みんなの顔を見ながら話せるようにしたし、その他の活動も真面目にこなしていくのだった。

この件で目立つ立場になったことから、彼の予想していた“他人からの妬み”が表に出てくるようになった。

学年を問わず、幾人かの生徒たちから嫌がらせをされるようになったのである。

しかし“いじめ”と言うほどではなかったし、その行為自体は嫌だったが、彼にとっては数ある悩みのうちの一つに過ぎなかった。

彼は独りだったが、今更その程度で折れる人間ではないと自分を認識していたことで、ある程度心を強く持つことができたのである。

よって彼はこれを放置し、時が経つにつれて自然となくなっていた。

ただ、“真面目な人間がクズによって被害を受ける”という理不尽さは、彼の心を曇らせたままだったが。

三年生になり、ある事件が起きた。

彼には中学でそれなりに仲の良かった女の子がいたのだが、彼女の恋人が「彼女と話すのをやめろ」としつこく迫ってきたのだ。

正直彼はそれでも別によかったし、くだらない問題に巻き込まれたくはなかった。

しかし、彼女は違った。

そのような状況になる前から、彼女は恋人の独占欲の強さに悩んでいて、そういった問題を彼に相談していたのだ。

そのことから分かるように、彼女は彼をそれなりに気に入っていたし、故に恋人の主張は受け入れられなかった。

それでも彼女は恋人に愛されているという状況をやめたくはなかったし、結局不完全燃焼なままこの問題は続いていくこととなった。それが後に更なる事件を引き起こすのであったが、それは後述することにする。

そうして様々な悩みを抱えたまま中学を卒業していくのだが、彼にとってはほぼ悪いことしかなかった中学時代にも、幾分のいいことはあった。

彼はクラスメイトに勉強をよく教えていたのだが、これはそのことからくるものだ。

ほとんどの人間は“それが当然だ”とも思っていたのか、感謝の言葉一つなかったのだが、彼もそれについてはどうでもよくなっていた。

そうして卒業に差し掛かった時、教えていた一人が“彼のおかげで今の僕がある”と言っていたのを人伝に聞くことができ、それを聞いた時彼は非常に嬉しくなったのだった。

同時に今まで何とも思わなかった、“感謝すらしない他の人間”に若干の怒りが湧いたのはご愛嬌である。

さて、いよいよ高校生になった彼だったが、新学期早々問題が起きた。

例の“独占欲が強い男”の友人が、男とタイマンで勝負をしろと持ちかけてきたのである。

彼は“俺に「彼女と話すな」と言うなら、彼女に「俺と話すな」と言えればいい”と思っていたし、それを彼女の恋人にいったこともあったが、結局無駄だったようだ。

：しかし、正直卒業したら彼女との接点もなくなるんだから、もう
時期的にも滅茶苦茶である。

ただその男の友人とやらが、今までに何度も彼を裏切った人間だ
ということが気になった。

「大方、俺が伸されることを期待して、噓けてきたんだろうな…。」
それが、彼の見解だった。

そして相手方の勢いのまま、断り切れなかった彼は喧嘩をすること
となってしまった。

結論から言うと、彼は余裕で勝った。

初めて殴り合いなんてものをしたが、彼には勝てるだけの能力があ
った。

故に、順当に、彼は勝ったのだった。

しかし、得るものは何一つなかった。

強いて言うなら、“喧嘩をした経験”だけである。

高校に入っても、彼は相変わらず、燃えなかった。

家庭の方も酷くなっていて、両親は家庭内別居状態だった。

実は彼が中学三年生の時に、父親が2年程働いていなかったことが
判明した。

給料は借金をして持ってきていたようだった。

そのことが分かってからも、父はほとんど働かなかった。

むしろ、特に彼の財布から金を抜き取るようになっていた。

父の仕業だと予想した彼が聞くと、悪びれもせずに「そうだ」と答
えた。

しかしそれすら、彼にとってはどうでもよかった。

彼は父の事を可哀相だと思っていたし、金に頓着しない人間でもあ
った。

そして、父の代わりに母が働くようになった。

彼も高校に入り、バイトを始めた。

学校に限らずどこの世界でも、先輩面した人間は彼にとって鬱陶しかったが、これは本当にどこも同じことだと思ふことにして、精力的に働いた。

家の住民税やらなんやらを、彼の稼いだお金で支払った。

ある日、父方の祖父母が家へ来た。父を働かせる為だった。

彼が、手にした金を家のために使っていることを知った祖父母は、それが当たり前のことのように何も言わなかった。

この時彼は違和感を覚えた。

何故なら彼にとって、“子供が親を助ける”のは当たり前前の事ではなかったからだ。

そうするのは、“相手に恩を感じている者だけでよい”と言う認識だった。

彼の中では、親は産んだ責任があるが、子供は親に対して何の責任も負っていないはずだった。

この世界に自分を生み落した両親や、それを産んだ祖父母、さらにその先祖までもを、彼は恨みなかった。

一時期彼は、何のために自分が生きているのか分からなかった。最終的に彼が出した結論は、“念の為”であった。

正直に言って彼はもう死にたかった——と言うより消えたかった——が、

「もしかしたら、数秒後にいきなり目の前に5億円ほど積まれてるかも知れない」

「もしかしたら、明日目が覚めたら魔法が使えるようになってるかも知れない」

などと考え、生きていた。

要するに、現実的にはまずあり得ないような希望に縋って、ある意味非常にポジティブに生きていたのである。

しかし、彼には自分にあった“ストレスの発散”の方法が分からず、

様々な要因によって齎されるソレは、彼の心に大量に蓄積していた。そしてここへきて、彼の心はようやく折れたのだった。

高校二年の夏、彼は学校を辞めた。

仕事は続けたものの、それからの彼は非日常を求めつつ、自堕落な生活を送っていくのであった。

01. プロローグ（後書き）

長ったらしくて済みません。

ずっと虐められていたとか、親に捨てられたとか、そういったあまりにもありがちな話にはしたくなかったのと、プロット上の理由とでこうなっていました。

シリアスな話は好きではないので、今後はほとんど出てこない予定です。

02. おっさん発見

シン—と、静まり返った夜道に、一人の足音が響く。
道を歩くは齡22の男。

身の丈は190cm程で、外に用も興味もないからと、仕事以外は半ば引き籠もりのような生活が続いているというのに、“なんとなくそうした方がいい気がする”と言って、トレーニングを欠かさぬこの男は、無駄にいい体格をしている。

それはさておき、今宵は週に一度の散歩の日である。

時折立ち止まっては、何かを探すようにあたりを見渡しているこの男。

傍から見れば幾分奇怪な光景だが、幸い今は深夜。男の行動に疑念を抱く者はいない。

この散歩は四年ほど前から続いていて、男にとってはそれなりに大切な時間のようだ。

Side 男

こんばんは、死にたがりです。

私は現在、“奇跡の機会”を探していたりします。

家にいるだけでは起こりづらいと思ったからです。

時間を深夜にしているのは、人通りも少ないから多少不審な行動をしても問題ないからです。

それに、普通に歩いている姿でさえ、他人に見られるのは嫌ですし。もう一つ理由があります。

それは、仮に“奇跡”が何者かの力によって意図的に起こるのだとしたら、それを起こす者はできる限り多数の人間には見られたくない

いのではないか…と思ったからです。

ちなみに今の私にとっての奇跡とは主に、

一つ、とにかく現世から離れたいので、なんらかの方法でこちらの意図とは関係なく致死量のダメージを受けることなどの“負の奇跡”。

二つ、異世界の人間との邂逅や、魔法やらの異能に目覚めたり、超大金が入ったりと言った、“正の奇跡”（起こった結果が正——良いこと——に繋がるとは限らないが、“起こった”ということ自体が私にとっては良いことである）。

の二つがあり、前者の“意図せず”の理由は、二つ目の起こる可能性：即ち“現世でもある程度幸せになれる可能性”を、未だに捨て切れていないからです。

つまり望ましいのは、“道を歩いていたら奇跡的にトラックが突っ込んできて死んだ”であって、“トラックに突っ込んでいたら奇跡的に死ねた”なんてことは、現時点ではよろしくない…と言うことです。

しかし、やはり奇跡なんてものがそう簡単に起こるはずもなく、またそれを承知で探しているのにも関わらず、未だに家が近づいてくると気分が落ち込んできたりします。

通り魔でもないかと思っっては、背後を確認し嘆息。

次元跳躍した誰かが現れないものかと思っっては、周囲を見渡し嘆息。隕石でも落ちてこないかと思っっては、夜空を見上げて嘆息。…あ、これで流れ星を見つけたことありますよ。もちろん願い事は叶いませんでしたが。

「生きている間に奇跡の光が我が身に降り注ぐことなど、果たしてあるのだろうか。」

答えが返ってくるはずもないのに、私はまた呟いてしまいます。

幾度となく繰り返したその問い掛けは、果てなき夜の闇へと吸い込まれていくように、私には感じられました――

S i d e o u t

結局、何も起こることなく今日の散歩は終わった。

風呂に入り、自分の部屋へと入った男は、いつものようにパソコンをつけ、ゲームをしたりウェブ小説を読んだりしながら、一日を終える。

こうして彼にとってのつまらない人生は、淡々と消化されていくのだった。

――数か月後。

a m 4 .. 1 7

ある山にて――

美しい自然が一望できる山頂を求めて、そこには毎年たくさんの登山者が訪れていた。

しかし15年程前に木々が大量に伐採されて以来、山肌は露出して^{ひとけ}人気も少なくなっている。

その山の中でも、ひと際高いところにある崖の上に、男は立っている。

「ふう…ようやくここまでできたか。

しかし、この荒れ果てた山の持つ風情が分かんとは、みな見る目がないな。

綺麗だった時は腐るほど集まっていたのに、そちらの都合で勝手に汚した後は誰も寄り付かん。自然は可哀相だな。

…不倫とかと似てるような…。」

「…自然が強いのか人間が強いのか分からなくなるな。

確かに災害に抗うことなどでできていないが、こうして自然を蹂躪している証拠を見れば、そう思うのも道理だろう。

自然相手には弱肉強食、人間相手には弱者を守れ…か。

まあ人間も自然の一部だと考えれば、どうでもよくなるな。」

暫しの間その場で殺風景な山を眺めていた男だったが、徐にその足を前へと動かした。

「ふむ、この一步ごとに命が削れていく感覚は、何とも言えん愉悦を齎してくれる。」

――数日前。

Side 男

ああ…つまらん。

相変わらずの変わり映えない日々、これからもこんな毎日が続いていくのかと思うと、本当にうんざりするなァ。

ネットで幸せとか売っとらんもんかねー。ないよねー。

うーん、奇跡を求めるようになってからもう何年になるかねえ。

最初はとにかく死にたかったんだよな。

それで段々といい意味での奇跡を望むようになって…ここ一年くらいは転生（記憶をなくして新たな体で人生再スタート）でもいいかな、とか思うようになったんだわ。

記憶なしの現世行きとかってのは、もうこれ以上この世界に自分を送りたくないから却下だけど。

もしかしたら、記憶をなくしても、本人の根本的な考え方――心の奥底にあるモノ――みたいなのは、変わらないかもしれないから、それを考えると“次の自分”が可哀相で仕方ないの。

だってこんなクソみたいな世界にまた生まれるんだよ？

しかもこの考えが正しかったら、もう既に“今の自分”に至るまでに、この体は何度も同じような思いをしてるってことでしょ？

もういい加減、解放してあげたい。解放してもらいたい。

そう、思ってます。

：それで、記憶なしだとしても、いわゆる異世界に転生するのならいいかなど。

記憶ありで体も維持される異世界行きてのがベストなだけどね、望み過ぎかな、と：最悪この世界ほど自分にとって理不尽じゃなければいいか、と思うことにしたわけ。

まあその前に地獄を経由しなければならぬ気もするけども。

しかし：内容の良し悪しに関わらず、何かしらの“きっかけ”が自分の幸せの道への懸け橋となるものだと思うって、待ち続けていたが、中々そんな機会には恵まれなかった。

まあ、最初はそれほど期待はしていなかったけど。

神がいたとしても、そんな簡単に人には干渉しないだろうしね。

その後は願いが強くなったことにより、奇跡などあくまで偶然によるものだと思いつつ、少しでも確率を上げるため散歩に出掛けたりもするようになった。

結局今の今まで何も起こらなかったがな。

「ああ！悲しいなあ！」

：私は自分が社会不適合者であったと、確信を持って言える。

自らの求めるものが得られぬ世界でなど、生きることには何の意味があろうか。

とにかく今はもう、生きていたくない。

「うん：そうだな、常世に行こう。逝ってしまおう、いい加減に。」

恐らくは現世で最大の幸せを：感じる事ができることだろうな。
この世に生まれ落ちたその瞬間からの決定事項を、今こそ実行しよう。

もう待っては居れん。

こちらから掴みに行ってやる。

待っている、未だ見ぬ我が幸福よ――

S i d e o u t

――舞台は山へと戻る。

「ふははははは！今！この瞬間こそが！我が人生に於ける至福の時

ぞ！！

やはりここにあったか、我が幸福よ！いや、初めからここにしかなかったのだな…！」

落ちる――

「くぅーっ！感じるぞ、風を！大気を！我が生命の最期にして最高の輝きを！」

これこそが私の求めたものよ！楽しすぎるなこれは…ククク。」

堕ちる――

「叶うのなら、件の転生のようになるか、もう次の人生などは存在せぬよう願いたいな…。」

胸の内に、現世で想い続け、結局叶わなかった望みを抱えながら、男は墜ちていった――

S i d e ? ? ?

「次……………右へ。次……………右。」

「ふむう…今日はヤケに数が少ないのう。」

「次……………ん?なるほどのう…辛かったな、右へ。」

彼女のような子に、何もしてやれんのが悔しいのう。
儂にできるのは、精々が来世を幸せに過ごしてくれることを祈ることのみじゃ。

「次……。次……。」

S i d e o u t

S i d e 男

「んっ……ここ……は……？……知らない天井……すらないな。」

目を開けると、真っ暗な……星のない夜空のような、現世で俺が想像した自身の未来のような……ともかく、視界一面には黒色くろしきが広がっていた。

そのままでは埒が明かないので起き上がってみると、足元も暗い、周囲も暗い。

自分が何かの上に立っている感触は感じられないが、確かに“直立した状態である”ことは認識できた。

今の自分は魂魄のような状態なのか、或いは一時的に感覚が麻痺しているだけなのか。

それはさておき、なるほど…これが「あの世」ねえ。

現世の記憶を確認してみると、自分が“無事に”地面に叩きつけられ、最初に頭蓋骨が砕け散り、次は脳漿がぶちまけられるだろうというところまで――恐らくは身体が潰れたであろう瞬間の直前…までは思い出せた。

まあなんにせよ、死んだことは確かだろうな。

フフ…フフフフフ…やったぞ…遂に俺はやったのだ！

イカンな、思い出すとまた興奮してきたよ…ククク。

未だ覚め遣らぬ興奮を抑えつつ、身体の状態を確認してみると、僅かだが感覚が戻ってきていることが分かった。

辺りをよく見ると、いくつかの青白い塊が見えた。恐らくは魂というやつだろう。

何故そんな風に見えるのだろうか。自分の体以外は、そう見えるようなシステムなのだろうか。それとも俺が特殊な状態なのだろうか。

アレらに意識はあるのだろうか。話せるのだろうか。

そこまで考えて、ふと、自分はどうか声を出して確認してみようとしたが、そういえばここへ来た時に声を発していたな…と、その必要がなかったことを思い出した。

が、

「せっかく喋ることができても、相手がいないんじゃ意味ないよなあ…。」

結局声が漏れ出てしまったことに苦笑しつつ前方に目をやったところ…

「……。……。」

距離の関係で聞き取れないが何か言っている、目算で4メートルほどはありそうなでっかいおっさんと、その脇にそびえ立つ二つの大きな（おっさんよりも大きい！）門が見えた――

03. 牛頭馬頭兄弟登場!

「――突然ですがみなさん、僕は今、墜ちています。」

落ちていく男を放って、時は若干遡る――

Side 男

遠くにおっさんと扉を確認すると、後は容易に予測できた。

なるほど、あれは閻魔だろう。そしてあっちは、天地それぞれの国へ通じる門だろう：どっちがどっちは知らんがな。

もしかしたら、地獄と現世かも知れないな。

あそこに向かった霊魂は、閻魔の裁定によって振り分けられるのだろう。

現世行きだけは勘弁だ。

そこまで考えて、ふいに自分もそこに行かねばならないことを感じた。
変な脇道へそれたりすることがないように、精神に直接干渉でもしているのかね。

「ま、他に当てもないし行ってみますか。」

……。

しばらく進むと、やはりというかなんというか、川が見えてきた。

「これが彼の有名な三途の川ね。
しかもご丁寧に賽の河原までありやがらア。」

河原を見ると、通行の邪魔だからなのか子供たちはいないものの、鬼らしき者達が徘徊しているのが確認できた。
別段用はないため、今は他の魂魄と共に舟へと乗り込み、川を渡った。

さらに歩いて目標の場所に近づいてくると、おっさんの手元にはノートのようなものがあるのが見えた。

なるほど、あれが音に聞く閻魔の台帳ですか…。

恐らくは死因や、罪の内容などが書かれているのでしょう。

そして判断が微妙なものは、多分隣に置いてある水晶のようなもので、過去を覗くなりして確認するのでしょうか…。

果たして私はどちらへ向かうことになるのか…。

罪を犯したことなどありませんが、“親より早く死ぬのは悪いことだ”などと、言われることもあるようですし、どうなるか分かりませんね。

「それより、自分の番まではまだ時間がありそうですね。暇だなア。」

とりあえずすることもないので、ボーっとしたりホゲーっとしたりしつつ、順番がまわってくるのを待っていると、ようやくあと一人のところまできたほげ。

家族以外の者と話すのは久しぶりだな…。

「次ィ。」

S i d e o u t

S i d e たぶん閻魔

「次ィ。」

む？こいつ、身体の適応力が尋常じゃあないのう。
もう五感がハッキリしとるようじゃわい。

「ちやおー。どちらさん？」

「儂はエンマじゃ。坊主の国なら話くらいは聞いたことがあるじゃろう。」

「やはり閻王か。主食は？」

「酒のツマミじゃな。さて、坊主の行先じゃが……ん？自ら命を経ち、親どころか祖父や祖母よりも先に逝っておるな。」

近頃は安易に死んでしまう者が後を絶たんな。
こういう輩には何かしらの罰を与えると決めておる。

「うん。飽きたからね。」

「なんとも軽率な…。坊主のような奴がおると、先ほどの病弱な女子なごのような人間が不憫で仕方ないのう。」

こういう命を粗末にするクズ共は、重い罰を受けりゃあいじんじや。

「ああ、なるほどね。可哀相だよね、そういう子も。」

「…坊主は地獄行きじゃ。喜べ、期間は通常の10倍の1000年にしてやったぞ。左の門へ進めい。」

「そうかい。んじやな、おっさん。」

S i d e o u t

S i d e 男

エンマと別れて門へ向かうと、門番っぽいのがおりました。話しかけた途端に、門の中へ放り込まれたと思ったら、実際は門の中の穴の中へ放り込まれていました。

それから、もう随分と長い時間落ち続けています。

10年くらい経ったんじゃないでしょうか。

現世ではなかなか味わえない「落下」の感覚ですが、これだけ長いという加減飽きてきて、死んだ時のように気分が高揚することもなく、退屈な日々を過ごしています。

恐らくこのつまらない日々も、刑罰の一つなんでしょうね。

ともかく、現世行きを免れたのは良かったです。

ここの世界へ来てからと言うものの、空腹や睡魔に襲われることはありませんでした。

まあそんなことだろうとは思っていましたけどね。

しかし五感は機能しているため、痛みなどは感じることでしょう。

ちなみに眠くなくても、寝ることはできました。

落ちている間にこれからのことを考えた結果、更に自身を鍛えることを決めました。

と言うより、今のようには地獄行きの状況になることも、一応予測してはいたんですね。

結局のところ、こうなった僕の道は二つです。

このまま“あの世”に居続けるか、記憶を残したまま現世とは別の世界へ転生する。

通常（記憶が消えるタイプ）の転生をするのはやっぱりだめですね。せっかく地獄に行くんだから、その経験を忘れないでおきたいです。そして重要なのは、来世の自分を苦しめないこと。

前にも言ったような気がします、真まこと新あらたになって元の世界へ転生しても、僕の“根源”の部分が変わらなかった場合は悲しい思いをするのが目に見えています。

なので、前述の道のどちらかしかないんですよ。

そこで、どちらを選ぶにしても鍛えておいた方が何かと得だと思い、それを決めました。

死んだと思ったら目の前に神が現れ一発強化：のような夢が広がる展開がなかったのは残念ですが、永遠とも思える時間があるんですから、自分で強くなってしまうでしょう。

一度も助けてくれなかった神に、今更縫ぬいろうとは思いませんしね。

そう決めはしたものの、落下している状態の今、体を鍛える手段がイマイチ思い浮かびませんでした。

そこでとりあえず落ちている間は、精神統一でもして内面の強化に努めることにしましたとさ。

……。

エンマと別れてから50年後――

「ひゃっふう。わたしは いま かぜに なっている。」

棒読みじゃいまいちノリませんね。

さて、あれからさらに長い時が経ち、ようやく底が見えてきました。ここまでくると、下から変なおいが漂ってきたりします。

「…あれ？これこのまま叩きつけられるの？

うわぁ…前に来た人の“中身”が残ってて、自分のと混ざったりしたらやだなあ。」

…掃除してあることを祈りつつ、着地に備えてだらだらしていると、地面が近づいてきました。

現世では知ることのできなかつた脳が潰れる瞬間も、この体なら味わえるはずです。

アドレナリンも今回は謙虚になっていて、しっかりと痛みも感じられそうですね。

さて、そろそろのようですね。

ここで“死ぬほどの痛み”に慣れておくとしましようか。
知識欲が疼きますねエ…。

そんなことを考えていると、
やがて地面が眼前に迫り、
僕はグシヤリと音を立てながら、
落ちてきた水滴が飛散するかのように――体の至る所をぶちまけた。

……。

「ふう…痛かった。」

本当に痛かった。

いつの間にか体は元通りになっていたものの、落下の衝撃からくる
痛みは残っていたんだよ。

戻った瞬間に激痛が走って、また死ぬんじゃないかとさえ思ったも
の。少しだけね。

まあ、一応地面が綺麗だったのには安心したが。

ん？誰かが近づいてきたようだ。

「「我らは牛頭馬頭兄弟である！」」

「うん。」

牛人間と馬人間。見たまんまだな。

「俺は獄卒長をやってる、阿坊っつーモンだ。」

「某の名は咩坊。副長でござる。」

「ふうん…あ、こんにちは。」

「本来なら罪人一人の為に俺達が来ることはないんだが、何分人手不足でな。」

地獄も不景気なのかね。

沙汰は金で解決できるのかしら。

挨拶も碌に返せないほどストレスが溜まっているとみた。

「大変だね。頑張ってちょ。」

「ありがとうよ。でも俺たちが頑張ると、その分罪人であるお前たちがい辛い思いをすることになるんだぜ？」

何をしたのは知らんが、手前は1000年もここにいなきゃいけ

ねえみたいじゃねえか。」

「まあなんでもいいよ。」

心身を鍛えるのにはもってこいでしょ。

「…そうかい。じゃあたっぷりしごいてやるから、自分の罪を悔い改めるんだな！」

さて、こちら頑張りますか。

04. はじめての じいく

「…なるほど、殺生のみね。」

畔坊から渡された書類を見て、阿坊が言う。

「それならお前は八大地獄の内の一つ、『等活地獄』に行くことになるな。」

【等活地獄】

想地獄の別名を持つ。徒に生き物の命を断つものがこの地獄に堕ち、アリ・蚊などの小虫を殺した者も、懺悔しなければ必ずこの地獄に堕ちると言われている。また、生前争いが好きだった者や、反乱で死んだ者もここに落ちるといわれている。

この中の罪人は互いに害心を抱き、自らの身に備わった鉄の爪や刀剣などで殺しあうという。そうでない者も獄卒に身体を切り裂かれ、粉碎され、死ぬが、涼風が吹いて、また自然と元の身体に生き返る、という責め苦が繰り返される。ただし、この「死亡しても肉体が再生して苦しみが続く」現象は他の八大地獄や小地獄でも見られる。

「そうか。それで、内容は？」

「どうやら自殺のようだし、“勝手気ままに殺生をした”ってことで「極苦処ごくくしよ」にするか。」

地獄は主に八つの階層に分かれており、これをまとめて八大地獄・八熱地獄などと呼ばれている。

さらにそれぞれの周囲には「十六小地獄」と呼ばれる小規模の地獄があり、地獄に落ちた亡者の中でもそれぞれ設定された細かい条件（生前の悪事）に合致した者が苦しみを受ける。

その内容は、犯した罪や大地獄の階層によってさまざまで、今回の極苦処もそのうちの一つである。

「うーん、まあいいか。行こうぜエ。」

「ククク…そう急かすなよ、すぐに着くさ。」

「早く行こうよオ！ パパア！」

「誰がパパだっ！」

「兄者…いつの間に子供なんて…。」

……。

「着いたか。」

「ここにきた人間は、あらゆる場所で常に鉄火に焼かれ、獄卒に生き返らされて断崖絶壁に突き落とされることになっている。担当はあそこにいる：なんとかって言う獄卒だ。」

「名前知らんのかい。」

「いいじゃねえか、所詮モブだろう？
それじゃ、俺たちは行くからな。」

「人手不足なんだから、数少ない獄卒の名前くらい憶えておいてやれよ……」

まあお疲れさん、案内ありがと。ばいばいパパ。」

こうして、1000年に渡る、地獄での生活が始まった――

「だからパパじゃねえっ!」

…始まった。

S i d e
男

阿坊達と別れた俺は、とりあえず担当獄卒の元へと向かった。

そこかしこから、肉の焼け焦げる臭いが漂ってくる。

見たこともない物体に囲まれているのは、恐らく高熱をもった鉄だろう。

その中心には大きな穴が開いており、その場から逃げようとした人間が、円形の囲いの上に立っている幾人かの獄卒に捕まっては、穴へと投げ込まれている。

「おい、なんとかさーん。阿坊に言われてきたよー。」

「…罪人か。俺はここの管理を任されている、「ぎゃあああああ」だ。

もう聞いていると思うが、ここは十六小地獄が一つ、極苦処である。

」

あ、また一人投げられた。

その時の叫び声せいで、この獄卒の名前は聞き取れなかったが、まあ知らなくても困らんだろう。

「えーと…じゃあしばらくよろしくお願いします、なんとかさん。」

「俺の名は「もうやめてくれええええ！」だと言っているだろう。」

「んー、なんか周りの喧騒が煩くて聞こえないっス。それに、名前なんか別に知りたくないっス。」

「貴様いい気になりおって…！」

よかろう、貴様はこの俺が直々に投げ込んでくれるわっ！」

なんか鬱陶しいおっさんだなあ。

「おっ、なんとかさんのなんとか投げが久しぶりに見れるぞ。」

「ホントかよ！あれで投げられると、すげえ勢いで飛んでいくからな、初めて見たときは興奮したぜ。」

「なんとかさーん！はやく見せてくださいよー！」

こ、こいつ…部下にまで名前を呼んでもらえないのか…！
なんて不憫なんだ…笑いを堪えきれん…。

「ぐっ…ええい貴様ら黙つとれ！お前も笑うんじゃない！」

さっさと飛んでけ！秘技、「ウワアアア…」投げ！！」

なんとかさんは、そう言って（何と言ったのかは聞き取れていないが…）俺の体を鷲掴みにし、投げた。

「フフフ…ここへきた人間は、その耐え難い苦痛により大抵は三日で精神が折れる。
せいぜい惨めな姿を見せてくれよ？」

そう呟いたおっさんの声は、もう随分と離れた俺には届かなかった。

なんとか氏に投げられた俺は、彼の部下たちの言った通りもの凄いスピードで、自分が穴の底へと向かっていることが分かった。
このままだと俺の体はまた、着地とともに潰れてしまうだろう。
まあどうせ元通りになるから、どうでもいいんだが。
そんなことより今は…。

「楽シイイイイイ！！！」

そう、楽しいのだ。

崖から落ちた時も、奈落——エンマのいた冥界と地獄とを繋ぐ穴——を落ちた時も、これほどのスピードは出ていなかった。

例えばジェットコースターがそうであるように、“速い”というのは楽しいのだ。

いやあ、死んでよかった！

グチャリ――

「…復活！」

こんな簡単に復活できるなんて、便利な体だなあ。
まあ痛いけどね。

「つか…熱くね？」

辺りを見回すと、その原因が分かった。

上と同じく、この穴の内部も熱い鉄でできているのだ。

穴の側面は平らではなく、登れるようにでっぱり（もちろんこれも鉄製だ）がついていて、ここから逃れたい亡者共が必死に登っているのが見える。

しかし大抵は熱さに耐えきれずに手を離してしまい、穴の底へと落ちては潰れている。

出口へと辿り着いた者も、上にいる獄卒によって再びここへ投げ込まれているようだ。

「なるほど…終わりの見えない苦痛によって、みな精神を壊されていくわけか。」

地獄の基本はそうなのだろう。
その苦痛の度合いは、階層によって様々だが。

「まあとりあえずは、この熱に慣れないとな…。」

そう、ここは等活地獄。

私の知識が正しければ、ここで受ける苦痛は地獄の中でも比較的緩いもののはずだ。

ならば、この程度で挫けるわけにはいかないだろう。

「ほかの奴らのように、逃げようとしたらダメだな。
心頭滅却でもするか。」

どうせ逃れられないなら、受け入れればいいのだ。

火はお友達だよお！の精神で、頑張ろう。

幸い、落ちてきた時に精神統一の鍛練は積んでいるし、まあなんとかなるだろう。

S i d e o u t

彼は知らない――

ここへ落ちてきて、彼のように心から冷静なままであった人間など、今までほとんどいなかったことを。

大抵の人間は落ちてくるまでの間に発狂するし、そうでない者も地獄へ着いた瞬間に自らの命運を悟り、（当然獄卒達に簡単に取り押さえられるが）暴れまわるのが普通だ。

小地獄を見た時に、挫けてしまう者もいる。

しかし、奈落で孤独と闘いながら何十年も鍛練された彼の精神は、最早常人のそれとは全く別の物になっていたのだった。

そもそも、生前から普通の精神はしていなかったが。

良くも悪くも、彼の精神は簡単に冷静さを“失える”ほど弱くはなかったし、強くもなかった。

彼は自分が他と違うことに苦悩したし、喜びもした。

話が逸れたが、死んでようやく光が見え始めた……というのも、彼が頑張れる一つの要因かもしれない。

ある意味夢が叶ったし、叶いかけてもいるのだ。

――とは言え、彼はまだ長い道のりを歩き始めたばかり。

頑張れ、男！ 負けるな、男！

誰も知らない――
なんとかさんの名前を。

05. 不審（前書き）

あまり面白くないです。

05. 不審

「ぎゃあああああ！」

「も、もうやめ…うわああっ!!」

地獄には、今日も悲鳴が響く。

Side 阿坊

よう！

泣く子も黙る牛頭馬頭兄弟の兄、阿坊だ！
今は弟と一緒に、地獄の見回りをしている。

「いやーこの悲鳴を聞いていると、仕事してるって気になるよなあ。」

「そうでござるな、兄者。

しかし仕事に精を出すのもいいが、そのやる気を家事の方にも少しは回してくれると、ありがたいのだが。」

「ま、まあ善処するよ…いつもありがとうな、畔坊。」

弟には俺のサポート役として、色々と助けてもらっている。

言ってなかったが、俺達にも家はあるんだぜ？

一応獄卒鬼の中ではトップにいるから、それなりにいい家に住んでいるつもりだ。

「うむ…。ところで兄者、昨日また極苦処の担当者が愚痴を言っていたぞ。」

「ああ、あの…えっと…なんとかって奴か。」

あいつ、いつもうるせえんだよなあ。

「そうだ。内容は相変わらず、自分のところで罰を受けている罪人のことでござったよ。」

なんでも、そいつにとって極苦処程度は、罰になっていないだとか
なんとかってことらしい。

だからと言って、こちらで勝手に場所を変えることなどはできない
けどな。

生前犯した罪によって決まるものなんだから。
しかし…。

「うーん、いい加減見に行つてやるか。」

そう言つて、俺達は極苦処へと歩を進めた

.....。

極苦処へ着いた俺達が見たものは、亡者達が鉄の上で焼かれる姿や、穴の中へと投げ込まれる様子。

呻き声や叫び声がそこかしこから聞こえており、まさに『これぞ地獄!』と言ったところだ。

しかしその中に一箇所だけ、妙な空気の間所があった。

「そんじゃ、もう一本。」

「ぐぬぬ…いい加減こっちが疲れてきたわい。」

「だらしねえな、それでも鬼かよ。」

「
●
●
●
」

俺達が見たのは、男が鬼と一対一で格闘している姿だった。

沈黙が続く中、静寂を破ったのは俺。

「…いや、なにあれ。」

こんな言葉しか出てこなかった自分が恨めしいっ！

「なるほど、あれでは確かに、愚痴りたくもなるでござるなあ…。」

「ありえないでしょ、何なのあいつ。」

「あれは確か、80年程前に此処へ来た者でござるな。」

地獄へ来たのに妙に落ち着いていたので、よく覚えておる。」

「…あー、鬼の俺達に向かって、『頑張っ』とかぬかした野郎か。」

そーいや居たなあ、そんな変な奴が。

刑が始まれば、すぐに泣き喚くようになるだろうと思っていたが…。

「どうしてこうなった…。いや、ホントに…。」

奴は俺達鬼でさえ、多少の熱さを感じる鉄火の上で、涼しい顔をして立っている。

逆に相手の鬼の方は、戦った疲れもあってか、苦しそうだ。

思わず頭を抱えてしまう俺…。

「…ありゃあただの人間じゃねえな。」

「某も同感でござる。一度閻魔大王のところへ赴くべきかと。」

「だな。そうと決まりゃあさっさで行くぞ。」

職員通用口からなら、一瞬で上まで行けるしな。

「承知。」

S i d e o u t

S i d e エンマ

「エンマさんこんちゃー。」

儂がいつものように仕事をしていると、牛頭馬頭兄弟が訪ねてきおった。

「……なるほどのう。あの坊主は確かに、他とは違う雰囲気じゃった。」

冥界（エンマがいるところ）へ来てすぐに、体の方も適応してたしのう。」

定期連絡の日でもないのにこちらへ来るのは珍しいなと思い、どうしたのか尋ねると、返ってきたのはあの時の坊主に関することじゃった。

130年前に、体の馴染みが早い男がきたのを、憶えておる。

「あいつについて詳しいことを教えてくれ。1000年分もの罪を犯すような、悪人にも見えなかったしな。」

そういえばこやつ達は、基本的に簡易書類しか見ないんじゃないのう。

詳しいことか…あれ？僕もほとんど知らんのう…。

「期間についてはアレじゃ、元々はただの自殺で100年じゃったんじゃが、態度が気に食わなくて10倍にしたわ。」

「…おいしいい！またかよ！裁定を下す奴が、そうやって自分の感情に流されやがって！」

「閻魔大王のせいで、彼の面倒をあと920年も見なければならないのでござるか…。」

その間ずっと、なんとかさんの愚痴を聞かなければならないと思うと、悲しくなってくるでござるなあ…。」

「つーかあれがずっとあそこに居たら、極苦処の奴ら辞めちゃうよ！人手不足なんだよ！どうしてくれるのよ！」

「落ち着けお前達。」

「あんたのせいだよ！」 「あなたのせいです！」

「いや…うむ。とりあえず、実は儂もあの坊主のことはよく知らんから、水晶で過去を覗いてみよう。」

「完全に主観のみで刑期10倍にしたのかよ…。まあいい、さっさと覗くぞ。」

「承知。」

一応儂の方が偉いんじゃないけど、分かっとなるんじゃないろうか…。

儂が念じると、水晶にはあの坊主の過去が浮かび上がり、儂らがそれを覗きこむと、映像が頭に流れ込んできた――

……………。

「生まれた時は普通の奴だな。家もまあ…何の変哲もない普通の家

族に見える。」

「弟が生まれた時あたりから、両親の仲が悪くなり、後に家庭内別居状態か。何一つしてくれない父親にも、身内で唯一優しく接しておるのう。」

「どの方面に対しても、潜在能力がかなり高いようでござるな。興味を惹かれるものがないようで、ほとんど活用できていませんが…。」

「友人だと思っていた者が、影では敵対者。さらに別の者によって、一方的に悪者にされる…。そういうことがあっても、彼自身は積極的に他人を助けているようじゃがな。」

「友人や家族にすら“都合のいい便利屋のような存在”として、いのように使われてきたようじゃな。能力の高さと、底抜けに優しい性格につけ込まれたんじやのう。」

「その性格についても彼は理解していたようで、小さい頃から悩み続けていたようですな。なぜ自分を責めるのか…彼の所為ではないと言うのに…。」

「段々と感情も希薄になってしまったようじやのう。本来は繊細で優しく、真面目な人間だったようじや。」

「プライドが高く、頭もいいため他人の意見が必要としない傾向にあり、全てを一人で背負い込んでしまう性格のようだが、この状況ではそれも仕方ないと言えるな。」

「環境や周りの人間のみならず、単純に諸々の運にも恵まれており

ませんね。そういう状況が続いて、生きること嫌気がさしてしまっただけでござろうか。」

「笑顔も殆どなくなってしまった。他人と関わることを避けるようにもなってしまったのう。」

「愛情や友情と共に、ありえないと思いつつも、“非日常”にも憧れのようなものを抱いているな。」

「こやつの日常、こやつの目に映る世界は、理不尽と苦悩で溢れておる。ずっとそんな日常から解放されたいと願っていたようじゃのう。」

「そして欲しかった理解者は結局現れず、孤独を抱えたまま、限界が来て自害に至った、か…。」

……。

「」「……。」」

これほどとは、のう。

「なんと悲しい子じゃ…ううつ。」

「泣くなよ…。つかこんな奴がなんで地獄に居んの…。」

「それは、軽率な大王の所為でござるな。」

「ようやく不運な人生を終えたと思ったら、今度は地獄に1000年だもんな。幸薄すぎ。」

「だって、所謂“不幸な人間”のような感じじゃなかったんじゃん。」

そういう者は、一目見れば分かる。

悪い意味で、オーラが違うからのう。

彼奴はむしろ、幸せそうじゃった…が、今になって考えてみると、死ねたことが嬉しかったんじゃろうのう…。

「『もん』じゃねえよ。可愛くねえぞ。…まあ確かに、そんな素振りを見せてなかったけどな…。」

「彼が今いるのは、徒に殺生を行った者が行く場所にござる。

しかし殺生どころか、むしろできるだけ虫や動物などの命を、助けようとしていたみたいでござるな。」

「しかもその匙加減が上手いんだよな。」

「まあその時も、助けられない命を見ては、悲しんでいたようじゃがな…。」

「…なあエンマさん、こいつ、何とかならんかねえ。」

「…これでも儂は冥界の王じゃ、それなりの権限は持つとる。人ひとりの裁定を“なかったこと”にするくらいは可能じゃわい。」

「マジか!?!じゃあさっさとあいつんトコ行こうぜ!」

「そう急かすな、すぐ行くわ。」

「いや、アンタは一番急ぐべきだろ…。」

「その通りでござる。」

「……。」

06. 拒否（前書き）

ようやく男の名前が出ます。

06. 拒否

【極苦処】

Side 男

ここへ来てから80年、相変わらず、鍛練の日々です。

「おーい、其処な坊主ー。」

まずは熱さを受け入れるところから始め、只管ひたすら無心になってみたり、熱と対話しようとしてみたり…25年かけて、ようやく平気になりました。

何も感じなくなったわけではなく、自分と熱が一体になったような感覚ですかね。

熱は感じるんですが、私の体を焼こうとしないんですよ。

そのお陰で、穴を登ったりするのも容易にできるようになりました。もう熱は、私のお友達です！

「…聞こえてないのか？おーい！」

次にやったのは、獄卒鬼に投げられることで、自分の体を打たれ強くすることですね。

登っては投げられ、登っては投げられ：繰り返すこと15年、今では“なんとかさんの全力のなんとか投げ”を、こちらが完全に無防備な状態で喰らっても、痛くも痒くもありませんちめんたる。いやあ、死なない体って便利ですねえ。無茶な鍛え方でも体が壊れないんですから！

「あれ、あいつこっち見てね？こら小僧、返事せんかい！」

何かさっきから煩いですね…。

その次が、“私を投げようと近づいてくる獄卒さん達との、戦闘行為”です。

さすがは鬼でしたね、どいつもこいつも戦闘能力が半端じゃないです。

ただ投げられるだけだった前の鍛練とは違い、相手も明確な意思を持って攻撃してくるので、痛かったです。

「鈍器のようなもの」で殴られると、当たった部位が文字通り吹き飛びました。

そこでまずは、回避能力を重点に鍛えました。

結果的には8年弱で、1対5程度なら完璧に避けられるようにまですなりました。

更にその過程での副産物として、殴られ続けた体は、いくら殴られても痛くないし吹き飛ばない、強靱な肉体へと変わってくれました。そしてようやく、攻撃能力を鍛え始めることができたんですが…。今までの48年間、来る日も来る日も穴を登り続け、打たれ続け、避け続けた結果、体全体の筋力が相当高くなっていることが分かったんです。

鬼が、ただのパンチ一発で悶絶するんですもん。

とはいえ、技術の方はまだまだでしたからね。初めのうちは、なか

なか思うように攻撃が決まりませんでした。

そこで、回避強化で培った動体視力を使ってみたり、理想の型を追及していった結果……30年後には1対10でも完勝できるようになりました！

攻撃の流れなどを体に馴染ませるのに、一番時間を使いましたね。

この時点でとりあえずここには用がなくなりましたが、他に行く当てもないので、そこから現在に至るまでは、毎日獄卒達と喧嘩しながら過ごしていました。

「あの…君…。」

今までの出来事を振り返っていると、突然モブ獄卒が話しかけてきました。

「何ですか？」

「あの三人が、さっきから君の事呼んでるよ。」

えっ…あれ俺のこと呼んでたの？

でもまあ…無視しようかなあ…面倒だし。

「おい！聞こえてんだろ！その…無視すんなコラ！」

「兄者、落ち着いて…。大王も、無視されたからって落ち込まないで下さい。正直気持ち悪いでござる。」

うわあ…うわあ……。

4m超えのおっさんがいじけてるのって、なんかこう…目にクるな…。

「畜生、ムカツクZEEEE!!!!」

「…!! 兄者!?!」

なんかきた。

こいつは確か阿坊だな…メンドクせえ。
とりあえず殴っとくか。

「返事しろって、言ってるdぶげらッッ!」

フハハハハハ!

この私の前では、獄卒長も形無しだな!
こうなると、苦勞した甲斐があったってもんだ。

「あれ、俺の事呼んでたの?」

「「「「「(ええエーッ!?)」「」「」「」

「いや…お前、気づいてただろ…。」

「もちろん。で、用件は?」

「ああ…まあとりあえず別の場所で話そう。」

「おっけー。」

さて、何の話なのかね…。

S i d e o u t

S i d e 畔坊

無事(?) 件の男と合流できた某らは、兄者と某の住んでいる家で、彼に事の詳細を説明しているでござる。

「(魔法の言葉、かくかくしかじか)で、(まるまるうしうし)なわけじゃ。」

本当に便利な言葉でござるな!

「…なるほどね。それで、どうするつもりなの?」

「儂の権限で、坊主を地獄から出してやろうかと思っている。こんなことで、坊主への贖罪になるとも思えんが…。」

そうだ。彼には本当に済まないことをしてしまった。(主に閻魔が)今まで気付けなかった某らも、少なからず罪に加担していたようなものでござる!(閻魔は“ようなもの”ではないけど)

「んー…やだ。」

…!?

「何っ!?! 何故じゃ!?!」

地獄に残りたい理由などあるのでござろうか。

某達が見てきたのは、やめてくれと懇願する者や、狂ってしまい人語を話せなくなったような者ばかり。

彼のような者は初めてだ。

「いやア、まだ一箇所しか行ってないからね。

まだまだ使える“アトラクション”ありそうだし、ここで鍛えて色々身に着けたいんだよ。」

なるほど、それであのような——なんとかさんが愚痴りたくなるような——状況になって居たのでござるか。

それにしても、地獄を遊技施設扱いとは…。

「そうか…しかしこのままでは儂の気持ちが収まらん。何かできることはないかのう…?」

「つーか、地獄に落とされたことは、気にしてないよ。

自殺の時点で覚悟してたし、期間のことだって別にどうでも。怒るとかそういうの、よく分からないから。

まあそれでも何かしたいって言うなら、どこでも自由に出入りできる、「フリーパス」みたいなのが欲しいな。色々回りたいし。」

…この者の感情には、まだ現世での影響が残っているみたいでござるな。

この子をこんな風にした奴らを呪い殺してやりたいのう。

そんなことをしても、彼は喜ばんだろうが。

それよりも、多少歪みつつも、優しい人間のままでいられたこの者の芯の強さを、某も見習わなくては。

「相分かった。各階層間を一瞬で移動できる、職員通用口も使えるようにしておこう。」

「俺達の家も使っていいぜ。拠点みたいなのがないと不便だろ。」

「ありがとさん。合鍵頂戴ね。」

…彼女かっ！

「では僕は一旦パスを作りに戻る。出来上がったらこの家に届けさせよう。」

「じゃあ俺は、地獄のマップでも作るか。」

「兄者が進んで頭脳派らしきことをするとは…。」

この者の力になってやりたくなったのかのう。

まあ某も同じようなものでござるが。

惹きつけられるような、不思議な魅力を持っているように感じる。

「うるせえよ。お前も手伝え。」

「承知。」

「ああそうじゃ、パスに名前書くから、坊主の名前を教えてください。」

」

「んー…神代かみしろ 龍哉たつやだ。」

「神代…龍哉じゃな…。」

よし、了解じゃ。他にも何か困ったことがあったら、遠慮なく言ってくれ。

儂は大抵冥界にいるからのう。坊主と最初に会った場所じゃ。

…それでは、また、の。」

「ああ、またな。」 「じゃあなー。」 「また。」

さて、某らも取り掛かるとするでござるか。

06. 拒否（後書き）

振り仮名がないと読めないようなのは嫌なので、厨二臭がしつつも現実的な名前にしておきました。

設定上の理由というのもあり、一応龍哉くんもそれは承知してくれています。

名乗る時に若干の間があったのは、自分でも厨二っぽいと思っているからです。

07. 地獄漫遊記

「フリーパス、ゲットだぜ!!!」

地獄に似つかわしくない、閑静な住宅街。

ここには獄卒鬼たちの住居がまとめて建っている。

その中でもひと際大きな、白ベースの一軒家で叫ぶのは、この物語の主人公である、神代龍哉その人。

おんとし
御年152歳。

「うっせえ! こっちはまだ作業中なんだから黙ってろ。」

反応したのは、人手不足とは言えそれでも結構な数のいる獄卒鬼を、獄卒長として取り纏める阿坊。

双子の弟である吽坊と共に、地獄巡りをする龍哉の為、地図を作っている最中だ。

ちなみに現在1192歳である。

「はやくしてえ。暇だよ父ちゃん。」

特にやることなく暇な龍哉は、先ほどから何やらこそこそと作業をしている。

「誰が父ちゃんじゃ! こんなに似てない親子見たことないわ!」

阿坊は牛頭の鬼、龍哉は人頭の人である。

「あ、うん、阿坊君うるさいよ。もうその話終わったから。お前が反応する直前に、俺が飽きて終わったから。」

…そんなことよりさあ、人に振り仮名って振れるのかなあ。」

「どうしたのでござるか？藪から棒に。」

作業場を部屋の隅に移した阿坊に代わり、畔坊が答える。

「いや、名前の上にバカって書くことってあんじゃん？『木下^{バカ}が呼んでるよ。』みたいなさ。」

そんでさ、現実でもそれをやってみんの。

人の頭の上に、「バカ」って書いてある紙を乗せたりしてさ。」

「なるほど。」

「…うん。と言うことで、なんと今日は協力者をお呼びしました！みなさんご存知、阿坊ちゃんです！！」

タツヤはアボウをショウカンした！
しかし あらわれなかった。

「さっさとこい阿坊^{あほう}。」

タツヤはアホウをショウカンした！

「うるせえエ！」

アホウがあらわれた。

「兄者…その、頭に…ルビが…。」

よく見ると、先ほどの龍哉の話のように、阿坊の頭には「あほう」

と書いてある紙が、いつの間にか貼られていた。
いつの間につけたのだろうか。

「あん？……！！おい龍哉、なんだ「あほう」って！俺は「あぼう」だア！」

「いや：何か俺もよく分からんのだが、濁点が夢の世界へ飛んで行ってしまったんだよ。

だからそう呼ぶしかなかったんだ、すまん。」

「意味が分からんわ！大体夢の世界ってどこだよ！」

「そりゃあお前：心の中さ。」

若干遠い目をしながら、語る龍哉。

「「心」と言う漢字があるだろう？」

恐らくお前は、右の点二つを置き忘れてきてしまったんだ。そう、若かりしあの頃へ：。

そしてバランスを失ったまま何百年も経過したお前の心は、もう崩壊寸前だったんだ。

だからそれを補うために、「あぼう」の「ぼ」が持っている濁点が急遽そっちへ行くことになったってわけさ：。

よかったな吽坊！お前の兄者は奇跡的に助かったようだぞ！」

「ううっ：本当に、本当に良かったでござるよ兄者：！某は：某はもういつ兄者が壊れてしまうかとっ：！！！」

「吽坊：。心配かけたな：。」

抱き合う二人の背後には、地獄なのに夕日が見える。
その時龍哉は…

「ああコレ…やりすぎたか？つか何故か昨坊の方がいつの間にか壊れてたな…。」

少し後悔。

数日後――

「さて、どこへ行こうかね。」

あれから、うざったい兄弟愛を見せつつも彼らが完成させてくれた地獄案内マップを手に、現在のところ当てもなく地獄を歩いている龍哉。

「ン？これは…。」

龍哉が目にしたのは、同じ階層にある刀輪処とうりんしょの項である。

「刀か…担当者も使えるのかナ…。」

どうやら「刀」の文字に惹かれた様子。

「素手での格闘は、とりあえず獄卒相手に圧勝できるまでになったシナ。

次は武器でも使ってみようカ。

防御面も、今まで喰らってきた鈍器とは違った鍛え方ができそうダシ。

…よし、ここに決めたヨ。」

そう言って、龍哉は刀輪処へと向かうのであった。

【刀輪処】

刀を使って殺生をした者が落ちる。10由旬の鉄の壁に囲まれており、地上からは猛火、天井から熱鉄の雨が亡者を襲う。また、樹木から刀の生えた刀林処があり、両刃の剣が雨のように降り注ぐ。人間界の火など、この世界の火に比べたら雪のように冷たい。

龍哉の目の前には、火に追われ、逃げ惑い、刀に切られ、火に焼かれる亡者達…と言った光景が広がっている。

「うん、なるほどネ。おーい、そこの獄卒君。僕もちょっとこの中に混ざって貰えるかな？」

「あ？何だお前は。」

「ああ、何でもいいんだけどね、こういうのを持ってるわけヨ。」

そう言って、懷から自身の名前の入ったパスを取り出す龍哉。

「それは…分かった。自由に出入りしていいぞ。だがそういう物を持っている奴は、普通地獄から抜け出す筈なんだがな。」

「まあ修行のためだヨ。ここでは肉体も精神も鍛えられるみたいだからネ。

精神力の強さに比例して、肉体が強くなっているように感じるだけかも知れンが。

どっちにしろ、死にながら鍛えられるってのはかなり美味しいナ。というわけで、ここには刀剣の修業をしにきたヨ。

君は使えるかネ？ある程度まできたら相手をして欲しいのダガ。」

「なるほどな…いいだろう、相手をしてやる。

お前の期待通り俺は剣技を学んでいる。ここの担当になるには必須項目だからな。

ちなみに肉体に関しては前者が正解だ。本当に鍛えられている。」

「そうカ、感謝するヨ。それじゃ、また会おうネ。」

そうして龍哉は、刀輪処内部へと歩を進めて行くのであった――

S i d e 龍哉

フフフフ…なるほどな、やはり刀剣は違う。

鬼の力で殴られてもビクともしない俺の体が、簡単に傷ついていくよ。

おまけに炎まであるし。

だが、こんなことで俺を止められると思うなよ…？

こんなモノ、すぐに克服してやるさ。

さて…極苦処と同じように、初めは炎に慣れることから始めるかな。その後は回避・防御能力だ。俺の体はまだまだ伸ばせる余地がある。鉄の棍棒を防げると言っても、俺の筋肉には隙間がある。

恐らく、薄い刃物によってその隙間をこじ開けるように傷がついていくんだろう。

だったら隙間をなくすまでだな。

目指せ、全身鋼人間！…いっそダイヤまでいくか？

三十年後――

「よう、バトルしようぜ。」

ここへ来てからしばらくの時間が経ち、ようやく例の獄卒と文字通り勝負できるところまできた。

「やっときたか。一体何年待たせるんだと思っていたぞ。」

「まあそう言うなよ。地獄が相手だと中々骨が折れるんだ。」

「当然だろう。罪人が罰を受ける場所なんだからな。さて、俺は西洋剣でいこうかな。」

そう言って奴は数ある刀剣群の中から、長剣を抜き取った。
ちなみに今回俺が持っているのは、ただの脇差である。

「んじゃ、始めっか。」

正直俺は刀なんて使ったことがなかった。
そりゃあそうだ、現代に生きていた人間なら、ある方が珍しいだろう。

刀輪廻の中で適当に武器を拾って使ってみたりもしたが、やはり対人とそうでないのでは、勝手が全然違うだろう。
なんせ相手は意思のある生物なのだ。

「…。」

そこまで考えて俺は、とりあえずありふれた袈裟斬りを放つことにした。

と言うか、放った。

「太刀筋がよろしくないな。」

しかし、結果は予想通り獄卒鬼には当たらず、風切り音だけが虚しく鳴った。

…やっぱり空振りって恥ずかしいね。

「次はこちらから行くぞ。ハッ！」

「くっ…うん、いい感じだ。」

その剣の描く軌跡は、鬼の体には似合わず、洗練された美しさを持っていた。

…さすがに疾はやい。さすがに鋭い。

大分鍛えたつもりだったが、避けきれず、防ぎきれずとはな…だが、これでいい。

こいつを乗り越えれば、俺はさらに強くなる。

つーか中で体鍛えておいてよかったよ。

防ぎきれなかったとは言え、それほど深くは傷ついてないからね。

「（なんだコイツの体は…俺の刃がほとんど通らないだと…。）

ふむ…獄卒奥義が一つ、《獄炎》。」

奴がそう言うと、剣身に炎が宿った。

流石は刀輪廻担当だな、火の扱いはお手の物ってか。

ま、それは効かんがな。

「炎は既に、お友達ッ！」

「フンッ！」

…あれ？ちょっと熱いな。

気とか魔法とかそういうタイプなんかな。

そんで使用者が込める気の量によって、熱さが変わるとか。

でもこっちだって、“それに比べれば人間界の炎など雪の如し”と
かって言われる地獄の炎を克服してるんですけど。

周りの炎の影響か？

地獄にいるから簡単にその炎を纏えて、尚且つ自分の気・魔力量分の火力をプラスできるみたいな。

…よく分かんないな。

よく分かんないけど、超えて見せよう。

……………。

「ふむ…刀の扱いはまだまだだが、それ以外はかなり高い次元にきてるな。俺の攻撃がほとんど通用せんとは。」

今回は様子見と言うことで、とりあえず数十分やりあったところで仕合を終えた。

「まあ努力してますから。」

でも剣よりも鋭利な刀を使えば、もっと傷をつけられるハズだよ。君達クラスの斬撃は、まだ無効化できないからね。

…じゃあこんな感じで、これからはしばらく相手して頂戴。」

「分かった。太刀捌きとか教えようか？」

「いや、自己流でやりたいからいらない。気遣いありがとう。」

俺は相変わらず、モノを教わるのが嫌いみたいだな。

「分かった。じゃあまたな。」

「うん、またねん。」

彼と別れた俺は、更なる研鑽を積むために、再び刀輪処へと足を進めた――

08. 昇天

「――それで、どうするんだ？」

S i d e 龍哉

極苦処には80年程いた私だったが、刀輪処攻略にかかった時間は60年ほどだった。

と言うのも、やはり極苦処での経験が活きたようで、それぞれの段階を思ったよりも省略できたからだ。

それでも、初めて扱う武器の技術を鬼に勝てるまでに昇華させるのには、時間がかかったが。

その後も各地を回りつつ己を鍛えていたが、ある時、自分がいた八大地獄は、正確には八熱地獄と言い、その隣に八寒地獄なるものが存在しているらしいことを知った。

すごい熱いのとすごい寒いのと言う、まるで正反対のように見える地獄が隣り合っていて、ご近所付き合いか大丈夫なんだろうかと思っただが、昨坊が言うにはほとんど問題はないらしい。

ただそうなったのもここ600年くらいの話で、それ以前は小さいいざこざが頻発していたようだ。

最終的に大きな争いが起きなかったのは、当時のエンマが二つをまとめ上げ、以降は牛頭馬頭兄弟が行き来しながら管理しているからだそうだ。

三人ともしっかり働いていたんだなあ…。

：話が逸れたが、その八寒地獄には私も惹かれた。

何故なら私は、熱には強いが寒さには弱かったからだ。

そこで、ちょうど半分までできていた刑期の、残り500年を丸々そちらで過ごすことにした結果、寒さにもかなりの耐性を付けることができたのだが…。

ある日、地獄の技？獄卒流？みたいな、よく分かんないけど刀輪処の担当者が『獄卒奥義が一つ、獄炎』とか言いながら使っていたよなやつを、対戦したほとんどの獄卒達が使っていることに気が付いた。

若干羨ましくなって阿坊にそれを言ったら、『知らん。』とだけ返され、非常に落ち込んだ。振り仮名のことを根に持っているのだろうか。

みんなだけそういうの使っててずるい――：そう思った私は、結局自らの力でそれらの技を盗もうと努力したのだが、やはり“気”の類の使い方が分からず（と言うより人間に使えるのかも分からない。気の存在も分からない。）結局“どんな技だったか”だけを覚えて終わってしまった。

そう…終わってしまったのだ、刑期の1000年が。

こうなると、少し寂しくなる。

私は、地獄での生活をそれなりに楽しんでた。

やっていたことと言えば鍛練だけだが、自分が強くなる喜びが感じられた。

地獄の数々の仕掛けや、獄卒達：それらを自らの肉体で以て乗り越えていくのは、ゲームやらで“主人公達が魔王を倒すために、敵を倒して少しずつ強くなっていく様子”によく似ていた。

正直、単体で魔王瞬殺できるくらいに強くなってしまった気もするが、問題ないと思いたい。

むしろ倒せないで欲しい。そうすれば、乗り越えるためにもっと強くなれる。

私は、自重しない。

：それはともかく、今はエンマ達三人と今後の事についての話し合いの最中だ。

どうやら私は長い時間黙りこくっていたようで、阿坊イライラ畔坊おろおろ、エンマは相変わらず無視されたことでいじけている。

「えーっと、何だっけ？」

「だから、普通地獄での刑期が終わった人間は、一旦人間以外の生物に転生して、自然界でその邪な魂を浄化するの！

だけどお前の場合本来地獄に來なくてもよかった人間だし、積極的に地獄と関わったことで通常よりも遥かに綺麗な魂を持っているから、そのまま転生して新たな人生を歩むか、天界：所謂極楽やら天国やらへ行くかを選ぶわけ！

：ったく、二度も説明させんなよ。」

「悪い悪い。んで：転生は記憶消されて赤子からだろ？」

「そうなるな。」

まあお前の魂は元々穢れてなかったんだが、そういう人間は、普通は冥界に來た時点でお前が通った門の反対側へ行って、転生するんだわ。

でもお前はそれをさらに磨いたことで、天界行きの権利を得たってこと。あそこはお前のように、相当魂が磨かれていないと入ることを許されないから、地獄送りにされた人間が直接天界入りなんて事例は滅多にないんだぞ。

「っーか初めてじゃね？」

どうやら知らないうちに凄いことをしでかしてしまったようだ。
偉業達成って燃えるよな。

「確かに初めてじゃぞ。」

天界へ送る人間は、冥界で儂が直接選んでいるから分かるんじゃない。」

お、エンマ復活した。

「俺凄エな：まあ何にせよ天界一択だろ。」

そもそも現世にいたくないからこっちへ来た俺が、記憶も体も初期化される道なんて選ぶわけがないし、天界とやらにも行ってみたいし。」

「まあそう言うだろうな、とは思ったよ。」

「そうでござるな。」

では天界へ行く方法についてでござるが、まずは一旦冥界へ戻っていただき、二つの門とは別の場所にある第三の門へと行っていただきます。

道順については、某ら三人が同行するのでご心配なく。」

「普通は儂の部下にやらせるんじゃないが、龍哉のことは自ら見送りたいからのう。」

「はいはいありがと。いつ行くの？」

これが本当の友情ってやつなのかな？正直まだよく分からん。

「冥界には一瞬で行けるし、今すぐにも出発できるぞ。」

「そうかー…。んー、鍛練の締め括りに、冥界までは奈落を登って行くわ。」

着いたら連絡するから、そしたら出発しよう。」

「いやお前、登るのに何年かかるんだよ…。」

「なるべく急ぐから待ってけって。」

修行中だって100年以上会わないこととかあったじゃん。」

「まあ…いいけどな…。」

「じゃ、決定で！頑張るぞオ！」

……。

その後僕たちはしばらくの間談笑して、彼らは仕事へ、僕は奈落へと、それぞれの道に進んで行きました――

S i d e o u t

Side エンマ

「次……………。次……………。」

今日も今日とて、死んだ者達を二つの道へと振り分ける仕事をして
おるエンマじゃ。

行き場をなくした魂で埋め尽くされ、混沌とした冥界を見て、誰も
やらないなら儂がやってやる！——と思ってやり始めたはいいもの
の、最初の頃は本当に大変じゃった。

今のように、部下もいなかったからのう。

地獄の方もかなり混雑しておったが、牛頭馬頭兄弟を見つけて獄卒
の管理職にしたのは当たりじゃったな。

区画整理をしてそれぞれに担当者も据えて、冥界から小地獄へ行く
までの流れをスムーズにしてくれた。

おかげで下の混雑を気にすることなく送れるようになったわい。

ま、獄卒の人員不足はまだ解消されていないみたいじゃがの。

「…にしても、龍哉が奈落を登り始めてから、今日で50年か。
ちように、上から下へ行くのにかかる年月が過ぎたことになるのう

∴。
」

奈落を登るなんて、儂でも骨が折れる。
進んでやろうとは思わんのう。
果たしていつまでかかるんじゃないあ∴。

S i d e o u t

S i d e 龍哉

「とうちゃあああく!!!」

遂に奈落を登りきることができた。

もんの凄く長かったが、何とかなってよかった。
ずーっと力を入れてなければならぬから、正直途中で後悔したこ
ともあったが∴諦める、などと言う選択肢はなかった。
なぜなら、カッコ悪いからだ!

∴ま、それはともかく、エンマのどこ行きましょか。

もちろん、以前来た時のように、“何故かエンマがいる方へ行かなければならないような気になってしまう”ようなこともない。まあ、そのエンマに用があって、現在進行形でそちらへ向かっている、俺が言うことじゃあない気もするが。門番も「登ってくる馬鹿がいたら通してやれ」とでも言っていたのか、すんなりと通してくれた。

「エンマちーす。」

「…えっ、もう？

さっき『まだまだかかるじゃろうなあ』とか思ってたばかりなんじゃが。

えっ、50年で登ったの？」

「ほお、来た時と同じ時間かい。

こりゃあ俺も凄くなったもんだな。」

「いや、凄すぎじゃろ…。

まあなんにせよ、無事に着いてよかった。お疲れ様じゃ。今兄弟を呼ぶからのう。」

「あいよー。」

大人しく待ってまーす。

……。

「おーっす、早かったなあ。
つかお前凄ェなあ。」

「二人とも、おひさ☆
まあ1000年間頑張って鍛えてたら、お前らもできるようになる
って。」

こいつら鬼だし、できるようになるよね…？

「いや無理でござるよ。肉体にも成長の限界と言うものがあるでござるからな。」

むしろ、人の身である龍哉殿が何故そこまで成長できるのか、不思議でたまらないのでござるが…。」

「ああ…それは俺も疑問に思ってた。
まあこんなに長く鍛えた人間の例を知らないから、もしかしたら可能なのかもしれないけど、それでもこの強度は人体の範疇を逸脱してる気がするわ。」

明らかにオーバーキル気味の攻撃やら熱やらに耐えられるんだもん
な…。

ん？…獄卒連中は、限界があるのに地獄という過酷な環境下でも随分と余裕があるようだったな…あの耐久性は種族デフォなのか！？
ズルイ！

「でもま、強くなれるんだからいいか。」

「そうじゃな。」

さて、そろそろ出発するかの。」

「あいよー。」

……。

……。

「いやー、どこまで行っても暗いねー。」

ホント、真っ暗だ。

見える範囲には、もう僕達以外には誰もいない。

そして、光はないのに相手の姿は見える不思議現象。

「そうじゃな。」

だから僕らが一緒に向かっているんじゃないよ。
迷っても目印等はないからのう。」

「死人に死は無えから、運が悪けりや永遠に彷徨うことになるぜ。」

「まあそもそも、大王の許可がなければ冥界を自由に歩くことすら
できない故、何ら問題はないでござるが。」

「“何故かエンマのところへ向かわなければならぬような気がする”
現象かあ。」

不思議現象その2だね！

「そうじゃな。」

儂の方に来させるために、人間の魂には暗示がかかっておるんじゃないよ。

門をくぐり、現世へと戻る過程でな。

死んだらその暗示が発動し、儂と話すと解除されるわけじゃ。」

「なるほど、そして各門へと向かうことができるわけだね。

その短い間だけ自由に行動できるみたいだけど、前に聞いたエンマの話だと、ココに来た人間は自我がすぐには目覚めないらしいね。現世行きはともかくとして、地獄行きの人でも逆らったりはしないってことか。

…即、目覚めた僕は何なのよ…。」

「その通りだ。やはりお前は賢いな。

龍哉の目覚めの件についてだが、正直俺達にもよく分かんねえ。成長限界のことも含めて、どうやら龍哉は何か特別な人間らしいな。」

「まあそういったことができるのは、神くらいじゃろ。

天界におれば、そのうち原因に会うことがあるかも知れんな。」

鬼やらなんやらより、神の方が能力的な意味で格上なのかな、やっぱり。

「ん？神と一緒に住むの？」

「ある意味では、な。」

向こうに着けば案内がいるから、そいつが詳しく教えてくれるだろ。」

「ふうン…。」

神って、強いかな。」

「某らは直接的な攻撃が主でござるが、彼らはいわゆる魔法のような遠距離攻撃が多いでござる。

まあ強さはあまり知らぬが、どちらが強いかと言えば、彼らでござろうな。」

魔法かあ…いいなあ。覚えたいなあ。

広域殲滅魔法とか…うへへ。

「なアに気持ち悪い顔で涎垂らしてんだよ。
ほら、そろそろ着くぞ。」

いつの間にか目的地に近いところまで来ていたようだ。
前方を見ると、そこには紫色に光る、魔法陣と思しきものがあつた。

「あれに乗ると自動的に天界まで転送されるようになっておる。
冥界よりも上にあるから、落ちていくとかは無理じゃしの。」

「いやあ、ここに来るのが目的ってわけじゃなかったけども、死んでから1100年間…長かったねえ。」

「あまり一緒には居られなかったが、龍哉殿と過ごす日々は楽しかったでござるよ。」

「そうだな畔坊…って、何今生の別れみたいな台詞吐いてんだよ。」

俺達だって天界には行けるだろうが。」

「鬼が磨かれた魂…あるの？」

「馬鹿にすんな！」

俺達の魂だって、それはそれは美しく磨かれてるんだよ！」

「兄者…嘘はよくないでござる。」

大王も含め某らは役職上の関係で神とも会ったりしなければならないので、定期的に天界へは行っているのでござるよ。」

「だよな。昨坊はともかく、阿坊の魂が美しいはずないもんな…。」

「ぐっ…：まあ俺達にも仕事があるからたまにしか行けねえけど、そっち行った時はお前のところにも顔出すよ。」

「その時は儂も行くから、一声掛けてくれ。」

「承知したのでござるよ。」

「よし、んじゃーそろそろ行くかな。」

まあお前らは中々いい奴だ。少なくとも現世であつた人間共よりは。会えてよかった…：かな？よく分かんねえけど、ともかく世話になったな、ありがとう。」

「某も、龍哉殿と会えてよかったでござるよ。」

「ああ、面白い奴だしな。」

それを考えると、アホなことしたエンマさんにも感謝か？」

「龍坊にも許してもらったんじゃないから、もうそれは言わんでくれ…。」

「いや、たまに言っとかないと、そのうちまた同じことやらかしそうだから。」

こいつが特殊なだけで、普通の人は怒るから。」

「まあまあ、魂の件での腹いせにエンマいじめんのはやめとけて。俺は怒らないどころか、むしろ感謝してんだからよ。」

現世行きにされたら恨んでたぜ。」

「龍哉殿は、現世では色々辛い思いをしていたようでござるからなあ。」

天界に行けば、人間界でのイメージ通り、それなりにいい暮らしができるでござる。」

「そうか。んじゃま、期待しておくかな。」

そうしたらば…えーと、魔法陣に入ればいいんだよね？」

「うむ、そうじゃ。向こうでも元気だな。」

「ああ、お前たちも達者で暮らせよ。」

そう言いながら、陣の内側へと足を進める。

中心辺りに来たところで、陣の輝きが一層強くなった。体が少し浮かんでいる気がする。

「じゃあなー龍哉。」 「また、でござるよ。」 「またのう、龍坊。」

「またな、三人とも。」

次の瞬間、目の前が光に包まれた。

あまりの眩しさに思わず目を瞑ってしまい、視力に影響はないんだろうか……などと考えてしまった俺は悪くないと思う。

そして浮遊感が一気に強くなった！……と思ったら、なくなった。

目を閉じていても辺りが明るければそれが分かるが、その明かりもいくらか弱まったようだ。

着いたのか、と思い目を開けてみると……。

「眩しいぞう……。」

現世でも“晴れの日の昼間、外に出た時に感じるくらいの光”には弱かった俺だが、地獄や冥界で過ごすうちにそれが悪化したのか……？少し遠くに街のようなものを確認することはできたが、すぐにまた目を閉じてしまった。

……。

あれからどのくらいの時が経っただろうか。

10秒、20秒……もしかしたら1分かもしれない。

そんな悠久とも思える時を過ごし、俺はようやく瞼を額へと向かって動かした。

「こんにちは。」

目を開けるとそこには、一人の男がいた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2949y/>

天国と地獄と一人の男(仮)

2011年11月18日05時10分発行